

仮宿舎に寝泊まりして坑木の貨車積載労働に従事する。この間、積載のない日はコルホーズ・ソホーズ・製材所に  
出向き、雑用に従事。

〃 〃 十一月  
多分この時期から伐採ノルマが軽減されるかノルマそのものが無くなったように記憶する。

〃 二十三年五月  
帰還。月の半ば過ぎノボパブロフカを発ちナホトカへ向かう。ここで四、五日船待ち。二十日過ぎ明優丸に乗船。翌日舞鶴へ上陸。復員手続きを済ませ、故郷へ向かう。

現在、全抑協三重県支部の理事として活躍されております。

(三重県 宇平 博)

## シベリア抑留回想記

滋賀県 林 憲 一

### 運命

私の祖父（五代目）林尚美は、明治三十八（一九〇五）年二月、日露戦争に鴨緑江軍第七野戦郵便局長として約一年間、奉天（瀋陽）に勤務（高等官八等待遇）。

父（六代目）林尚憲は、昭和九（一九三四）年より旧南満州鉄道会社社員として奉天本部に勤務（職員↓副参事）、昭和二十一年六月引揚げまで十二年間、奉天に在住しました。

私（七代目）林憲一は、父とともに渡満（当時小学四年）、昭和二十年三月入隊まで十一年間、奉天に在住する。三代も奉天に住むというのも、これも何かの因縁と感ずる。

## 生まれ変わり

平成元（一九八九）年ころ、数基ある林家の墓石の一つに「竹田吉忠の墓」と刻まれた大型の墓石の側面に「元治元（一八六四）年七月十九日、京都にて討死、二十歳」と刻まれており、いろいろ調べてみるに、禁門の変で京都御所の蛤御門の緒戦で彦根藩の七人が戦死しております。当時彦根藩は幕府方より勤皇方になり、官軍として御所の警備に就いていた。もし幕府方であれば、会津若松藩のあの悲劇が彦根でも行われただろう。年表にて調べるに、私の生まれた大正十三（一九二四年）年七月二十日のちょうど六十年前となり、まさに私は生まれ変わ리と思います。

昭和二十年三月、フルキ教育隊に入隊し、半地下式の宿舎で初年兵教育を受ける。毎日古年兵よりビンタを受ける（私的制裁禁止と言われていたが）。韓国兵もあり、何人かが脱走した。訓練

の他に近くの山へ行き、分隊単位でワラビ採りの競争をし、後日ハイラルの原隊では再々夕食にワラビの入ったまぜ御飯が出た。

昭和二十年五月、原隊ハイラルへ移動（前にいた三六二部隊は沖繩へ転出）。

毎日もっぱら砂丘で対戦車攻撃の特攻訓練をする。古年兵の話によると、この地下には大要塞があるとのことであった。

昭和二十年七月、陣地構築のため大興安嶺に移動。分隊単位で山の上より立て坑を掘る。生まれ初めて初めての重労働で私は余り役立たず、滑車で岩石をズックのバケツに入れ引き上げる仕事をする。次に、伐採された二メートルの坑木の集積作業に六人が、ある丘陵地に移動し幕舎生活をする。近くには見渡す限りのお花畑があり、実にきれいであった。ここでも余り役立たずで、留守番と炊事担当であった。

昭和二十年七月下旬、陣地構築の所へ戻り間もなく幹部候補生の募集があった。小隊長、中隊長

の説得があり、嫌々承諾する。

八月上旬試験当日、一装の軍服を着て飯盒に白飯、塩メンタイの干物の弁当を持って師団司令部（ブヘトの貨物廠）へ行く。試験問題を見るも全く書く気せず、名前を書いて白紙にて提出する。

（内地であつたら営倉入りだろう）。全くやる気なしであつた。小隊では私を入れて二人落第。

間もなく幹部候補生は意気揚々と原隊ハイラルへ集合教育に出発した。後日聞くとところによると、八月八日のソ連軍侵攻で、ハイラルは初年兵、在満召集兵、韓国兵等で頭数は多いが烏合の衆で、兵器弾薬もなく、ソ連軍の重戦車により壊滅的打撃を受けたとのことであつた。これが助かつた一つである。

八月十日ソ連軍侵入により、私の小隊から落第の二人を入れた数人が挺身大隊へ転属となり、ブヘトの貨物廠へ行つてみるが、小隊長、分隊長は前年の甲幹、乙幹で古年兵はなく、全員同年兵（初年兵、愛知、静岡出身の召集兵）であつた。

抑留後の極寒、食料不足、栄養失調、重労働等は他の部隊と同様なるも、階級の差別、私的制裁等の圧力は全くなく精神的、肉体的には助かり、これも助かつた一つである。

#### 芸は身を助ける

挺身大隊は最新の自動小銃（奉天の造兵廠で作られていた）でゲリラ活動をするとのことであつたが間に合わず、三八式騎兵銃、弾薬百二十発、手榴弾二発、乾パン二袋、牛缶一個、押し麦を軍足に四個、完全軍装にて、すでに構築されている陣地に向け五十人の小隊で夕方に出発し、夜通し陣地の方に向かって歩くも方角を間違えたらしい。食料も心細くなり、一刻も早く鉄道の通っている所へと一直線に進み、山を越え谷を越え（山は余り高くないが）、谷間で押し麦のみの飯で野営をし、三日目の夕方、やつとのことで新しい労務者用の宿舎に到着するが、全員腹ペコである。調べてみるに、あるのは炊事用具とトウモロコシ

の粗びき粉のみであった。小隊長が「誰かこれを調理する者はおらんか」とのことで、私が名乗り出て直ちに他の者を指揮した。私は中学時代、近所の満人の労務者用食堂で満語の勉強かたがた、肉万頭、ギョウザ、煎餅（チェンビン）等の作り方や食べ方等を見ており、トウモロコシの粉を万頭に加工する方法も知っておりました。トウモロコシの粗びき粉を熱湯で溶いて釣鐘型にして熱し器でふかし、それを皆で食した。

その晩そこで過ごし、翌日の午後、やっとのことで森林鉄道の沿線に到着した。そこで、ザラ半紙に謄写版で書かれた関東軍司令官の停戦命令書を見せられ、終戦を知りました。私たちは、陣地構築のころより大体うわさは聞いていたので余り驚かなかった。私は上等兵に進級した。もう少し停戦を知らずに山中をさまよっていたらソ連戦車と交戦していたかもしれないと思う。これも助かった一つである。

## 死の一步手前

抑留後、昭和二十一年の正月ころより三段の木製ベッドに寝ていた者で、毎日二、三人ずつ栄養失調で亡くなる者が始まった。朝食の時間に呼びかけても応答なしである。私はその年の二月十一日紀元節の日に二度の高熱が出て直ちに入院したが、薬はアスピリンのみであった。同室に朝鮮の三中井デパートに勤めていたという野登川出身の野村君を知りよく話をしていたが、彼は間もなく両手両足の凍傷と栄養失調で亡くなった。

私も血便が出だし、間もなく意識不明となった。何時間か、それとも何日間か分からなかったが、意識が回復し気がついたときには熱も下がっていた。初めて白米の重湯をいただき元氣が出始めた。あのまま死んでいても分からないまだ。これも助かった一つである。高熱が下がって退院するも、頭はがんがんするし体はふらふらし、伝い歩きがやっとのとき、軽労働の仕事をする事となった。

舎前にネズミ色のドンゴロスのような毛布に裸のまま包まれた遺体、霊安室（小屋）に山積みされ入りきれない遺体を丸木の手製の担架で二人一組となり収容所の裏山の丘陵地の砂地に運び、掘ってあった五坪ほどの大きな穴に十七体を交互に入れ、砂と雪の混ざったのを上からかけるも砂が足らず、歩哨が「ダバイ、ダバイ」と怒鳴り、遺体の上上がり踏みつけよと命令する。私はナムアミダブツと祈りつつ、やっと被せることができた。その翌年二十二年の夏、一日の作業終了後、前年に十七体を埋めた横に、長さ、深さ二メートル、幅五十センチメートルくらいの穴を幾つか掘り、十七体の遺骨を二体ずつスコップで分けて改葬した。二人ずつの番号をつけて終了した。

そのうちに体力も回復し体が改善され、四分所にいた後半は、二人一組の伐採作業や大型の十輪車の積載車に巨大な丸太の積み込み作業、大型無蓋車に大きな丸太を積み込む積載作業（いずれも

車上に二人乗り、巻き上げの進行を指示する）、川一面に引っかけた大きな丸太の山の先端をテコ一本で崩して川の流れをよくする作業等、どれも危険な重労働であったが、小隊のトップでやることができた。

#### 運命の別れ道第一回

昭和二十年の秋、ブヘトの収容所から三日ほどでチタの手前のノバヤの寒村（駅もホームなし）へ。下車して五百人が製材工場へ、千人は五〇キロメートル先の四分所へ伐採作業にと二つに別れ、その晩は川原で野宿をすることになった（じゃんじゃん焚き火をするも寒くて寝られず）。後日、話によると、ノバヤの方は半分の二百五十人死亡し、四分所の方は三分の一の三百三十人死亡とのことであった。多分に、ノバヤの製材工場の方は、昼間の作業の他に夜間に坑木の貨車積み込み作業の連続労働と、粗悪な環境や少ない食料でそのような悪い状態になったと思う。

四分所で二年後、三百三十人死亡と転出で半分の五百人ほどになり、ノバヤの製材工場へ移動するも夜間の積み込み作業はときどきある程度であった。私は四分所の方へ分けられたのが良かった。これが運命の別れ道と思う。

## 運命の別れ道第二回

昭和二十三年、ノバヤでは製材作業が多く、自動車、貨車への積載作業、流木、道路修理等の作業をした。昼休みには川の貯木場で台湾ドジョウを取ったり、道路修理作業の合間にニラを採ったり、昼休みに小川ではドンコ（ハゼの一種で満州の川にいた）を捕ったりした。ドンコはセメント袋の糸に落ちていた針金をつけ、アブのえさで釣る。これらを大いに食べ体力をつけて、仕事をばりばりやりました。

その他、衛門のソ連兵の当番や将校の当番（週一回、日曜日にサウナの仕事）で、川からタルで水汲み、薪割り、将校や家族の入浴の準備、終了

したら私一人が入浴をした。その後、将校の家に行き夕食をごちそうになった。若い奥様が料理中は一歳ぐらいの赤ん坊の子守りをした。

昭和二十三年八月ころ全員集合、出発組と居残り組に分けられたが、私は意識的に出発組から居残り組に変更を申し入れた。これが後日、出発組は二十三年秋に帰国したとのこと（米原の息長村出身の木村氏に出发組へ誘われたが私は断った）。居残り組も間もなく出発しナホトカへ移動し、以後約一年間、港湾の建設、アパートの建設等の作業をするも、ノルマもなく自主的な作業で、昼の休憩時には港湾で泳いだり、ハッピーで上がった小さなキュウリ魚を捕り塩ゆでにして食べたり、宿舍近くの山で山菜を取ったり、作業場への往復道中で石鹼をパンと交換したりして、大いに食べ体力をつけた。

昭和二十四年九月の帰国のときは体重は五十八キログラムになった。二十三年ノバヤの出发組、居残り組の判断で居残り組は一年間帰国が遅れる

も、体力を回復し力をつけて帰国に臨んだので、直ちに父母が営んでいた菓子パンの販売、飲食店を一手に引き受け、初めての商売に挑戦した。父は十七年に結核を患い、幼い子供五人もおり、引揚げ前後の心労により大分弱っていた。私の帰国十カ月後、咯血にて亡くなった。それ以後、一家の中心となり精力的に働けたのも、抑留後半、体力の回復、体力増強に努めたおかげである。

#### 冷静な判断及び絶対にあきらめないこと

昭和二十年八月十七日、大興安嶺のブヘトの収容所に入った時点で脱走のことは一度ならず考えてみたが、周囲が全部敵側であり、少々満語が話せたり一般人に変装するも奉天までは遠距離でこれは不可能であると判断し、運命に任せていくことが安全なりと判断し脱走のことは一切考えず、これからいかに生き延びるか、体を冷やさないよう、また怪我をしないように注意して、元気で帰国することのみに専念した。おかげで元気に帰っ

て来られたのである。我が家の兄弟姉妹は現在も全員元気で生存しており、合計年齢は八人兄弟で五百六十四歳である。

あの八月十五日の終戦後の混乱のときに、それぞれの所で生き抜いてこられたのも、両親の思い、ご先祖様のお守りがあったからこそと思い、感謝しております。

#### 追記

帰国してはや五十八年、私は満七十九歳。平成十五年現在、ソ連より抑留引揚者は四十七万人、現存者七万五千人。現存者七万五千人の生き証人、実に六分の一に減ってしまった。多くの戦友の遺骨が未だ帰っていないことを考えると、改めて戦争の愚かさを考え、戦争は絶対にしてはならないと叫びたい。

平成十一年、全抑協滋賀県連合会事務局を引き受け（全抑協発足以来、事務局をやって来られた関甚衛氏死去により）、全抑協中央会の御指導、

建立助成金、関係機関、遺族、会員等々の寄付金の御協力により、平成十二年十一月、黒御影石の立派な慰霊碑「平和の礎」を彦根市の護国神社の隣に建立、盛大な除幕式及び慰霊祭を挙行いたしました。今年平成十五年、はや四回目の慰霊祭を十月十日に盛大に行う予定で、現在準備を進めております。

### 【執筆者の紹介】

本籍地 滋賀県彦根市佐和町（旧・上藪下町）

現住所 滋賀県彦根市本町

生年月日 大正十三年七月二十日

家族構成 父 林 尚憲、母 千代信の長男として生まれる（四男四女）

学歴 昭和十七年三月

旧満州国奉天市奉天第二中学校卒業

軍歴 昭和十九年六月

徴兵検査により第二乙種

昭和二十年三月

大興安嶺東側のフルルキ教育隊入隊

昭和二十年八月十日

ソ連軍侵入により挺身大隊に転属

武装解除 昭和二十年八月十七日

武装解除（フヘトにて）、引続き收容所

へ

帰還 昭和二十四年九月二日 舞鶴上陸

帰還する

（滋賀県 陌間 政雄）

### 終戦と抑留の記録

兵庫県 上野 恵 三

入隊以後の記述

軍隊手帳のほか、少々資料を持っていたが、シベリア、イルクーツク北方七〇キロメートルのシヤマンカ村での抑留中に発疹チフスにかかり紛失してしまったので、うろ覚えではあるが、脳裏